

「国際開発協力におけるキャパシティ・ディベロップメントと制度変化」 に関するセミナー・議事録

2008年7月17日

10:00-10:15

◆主催者挨拶

■ 早稲田大学アジア太平洋研究科長・天児 慧

早稲田大学では、現在、グローバル COE・「アジア統合のための世界的人材育成」プログラムを実施している。プログラムでは、アジア統合に向けた「人材育成」のあり方やアジアにおける環境問題へ、地域としてどのように取り組んでいくかが問われている。その他、アジアにおける開発めぐる問題を解決していくために、国際的ネットワーク構築をどのようにしていくべきかも重要な点である。今回の国際セミナーでは、これらのアジア統合をめぐる諸問題を解決していくための議論が活発に行われることを期待しています。

■ 国際協力機構・開発研究所準備室長・加藤 宏

今、なぜ、キャパシティ・ディベロップメント(CD)について議論するのかについて2つの理由を述べておきたい。第1は、CDが国際的な援助コミュニティで語られているからである。2005年のパリ宣言においてもCDは重要視されている。国際的な注目を集めているCDについて、日本もきちんと話し合い、世界に向けて提言していく必要がある。第2は、CDの概念は主として欧米のドナーによって作り上げられた概念であり、日本にとっては外来の概念である。自らの援助を振り返るためにも、CDの議論は日本の援助体系をJICAとJBICが合併する前に見直すきっかけとなるのではないだろうか。今回の国際セミナーでは、こうした点も踏まえた議論が行われ、日本におけるCDの研究や実践がより活性化することを期待したい。

■ 国際協力銀行・開発金融研究所長・荒川博人

MDGsを開発援助の量と質からどのように達成していくのかが問われている。有効な援助をしていくためにはCDと制度的枠組みが重要である。相手国の制度を活用しながら援助国自身のキャパシティを高め、援助をしていく必要がある。援助をしていくうえで制度が重要であり、制度を生かしていくためにもCDをしていく必要がある。そのために多くのドナーと協調しつつ、開発を進めていくことが重要であり、今回の国際セミナーでこうした点が議論されることを期待している。

■ 日本貿易振興機構アジア経済研究所・研究支援部長・佐藤 寛

「キャパシティ・ディベロップメント(CD)と制度変化(IC)」というテーマは非常に重要なテーマとなっている。特に議論してほしい点が2つあり、1つはキャパシティ・ディベロップメントであり、もうひとつは新JICAとの関係についてである。アジア経済研究所はJICAと同じく独立行政法人であり、そうした研究所としてどのように今後の展開を考えて

いくべきについては、JICA の新研究所との協力も考えていきたい。また、大学などとのアカデミックなレベルでの議論も行っていきたい。この 2 つをどのようにバランスを取っていくのが課題である。そのため、JICA や JBIC や早稲田大学とこれからも協力しあっていければと考えている。この 2 日間の国際セミナーの成功を期待しています。

10:55-13:00

◆セッション 1：国際開発協力におけるキャパシティ・ディベロップメントと制度変化：
研究と実践の過去・現在・未来

モデレーター：丹呉圭一（埼玉大学/早稲田大学）

基調報告 1.1：松岡俊二（早稲田大学）

“Capacity Development and Institutional Change in International Development and Aid”

基調報告 1.2：加藤 宏（JICA）

“Capacity Development and Japanese Technical Cooperation”

基調報告 1.3：Heather Baser（コンサルタント・元 ECDPM）

“Capacity Development and Institutional Change: from Predictability to Unpredictability”

コメンテーター：柳原 透（拓殖大学）

〔松岡報告へのコメント〕

プログラムとは、社会的アクターや援助資源インプットの相互関係の形成という包括性を意味する。主にプログラムは、3つのアクター（政府・企業・市民）と3つのファクター（政策と対策・人間と組織・知識と技術）を含むプログラムとして定義される。マクロとミクロとつなぐ（マクロ・ミクロ・ループ）ために制度は、重要な役割を果たし、重要な機能を発揮するであろう。

〔加藤報告へのコメント〕

JICA は、日本の援助実務家にとって意味のある枠組みとしての CD 概念を提供していない。しかし、地道な努力によって CD の視点からそれ自体の機能を評価し、反映しようと試みていると言えよう。

〔Heather 報告へのコメント〕

CD の過程を構成する多くファクターには、非公式もしくは隠れた制度が存在する。明確と不明確、公式と非公式との間の相互作用の性質は、能力向上のための効果的かつ重要な決定要素である。

コメンテーター：佐藤 寛（アジア経済研究所）

制度変化とキャパシティ・ディベロップメント（CD）を何故結びつけるのか。CD とエンパワーメントはどのような関係にあるのか。CD というカタカナ語の問題点が感じられた。日本人が理解するキャパシティ・ディベロップメントと英語の CD との違いを埋めるためには日本語として定着することを考える必要があるだろう。英語の CD を使ってしまったら一般市

民の日本人を取り残してしまうのではないかと考える。

ディスカッション

〔回答者：松岡〕

基本的には、コメンテーターと同じ問題意識を持っている。まだまだ CD の議論は歴史が浅く、アカデミックな研究との交流もほとんど持たないまま CD の議論が進められてきた。今回のセミナーでは、従来の CD の議論にプラスして制度の議論を行うことにより、市場モデルの限界性を表現したかった。また、エンパワーメントは CD の一つの手段であり、重要な要素であると考えている。

〔回答者：加藤〕

CD の曖昧さを拭い去るために今回のような議論を展開した。CD＝「能力開発」としてはいるわけだが、国際社会で使用されている CD は能力開発だけではない。また国際社会で使用されている CD に日本があわせる必要はない。制度と CD の関係については、現場で獲得したものを維持していくためには、制度化していく必要があり、今点が今回のセミナーの重要なポイントでもある。

〔回答者：Heather〕

佐藤さんによって紹介された慣習に対してコメントがある。国や社会の慣習を考慮に入れて CD を考える必要がある。例えば、日本の慣習は、アフリカや欧米諸国とは異なるのだから。

■ 新 JICA は制度変化と CD をどのように扱っていくべきか。

〔会場からの質問〕

新 JICA になることにより資金援助と技術援助が一括され、より効率的になる。この点ではこうした一体的な取り組みを行ってきたアジア開発銀行（ADB）などの取り組みが参考になるのでは。ADB のメリット・デメリットは？また国連大学（UNU）で 34 の大学のネットワークができると聞いているが、グローバルなベースが実現するのでは。そこに新 JICA も名乗りをあげるべきなのでは？

〔回答者：松岡〕

UNU の大学院を作り、途上国の人材育成の支援をしていくものだと聞いている。日本の大学や新 JICA の研究所と UNU が共同研究を行う可能性も広がるものと考えている。新 JICA の誕生に当たっては、戦後の日本の援助の歴史で何が変わったのか。何を新しく生み出す必要があるのかをよく考える必要がある。JICA・JBIC や日本が今まで取り組んでこなかった CD に今こそ取り組むべきであり、その取り組みに対し、午後も議論を広げていきたい。

14:00-17:30

◆セッション 2： 開発過程におけるキャパシティ・ディベロップメントと制度変化

モデレーター：庄司 仁（JBIC）

報告 2.1：斎藤文彦（龍谷大学）

“Going beyond the Buzzwords of Decentralization and Local Governance Reform”

コメンテーター：桑島京子（JICA）

当初から CD に関する概念を加藤さんたちと議論してきたのですが、CD というのはあいまいで分かりにくいので、そのままではプロジェクト・デザインをどうするのかには生かしていくので、もう少し特定の具体的な事例に即して議論をしていく必要がある。

制度やガバナンスや CD はある意味で重なる部分もあるのだが、斎藤報告はそれぞれ非常に難しい概念をうまくまとめていると思う。

報告 2.2：又地 淳（JICA）

“Capacity Development in the Education Sector and Institution”

コメンテーター：黒田一雄（早稲田大学）

又地さんが発表していただいたプロジェクトは、JICA の金字塔と言いますか、成功例として取り上げられているものです。ある意味 CD のモデルとして定義されたことは有意義だったと思うのですが、これがモデルとなりえるのかについて若干の疑問がある。このプロジェクトは個人のリーダーシップや長い経験に裏打ちされた形で展開されてきたものです。そのため、他のコンテキストに関して応用性をもっているのかが問題だと思う。

報告 2.3：栗田匡相（早稲田大学）

“How do the Institutions Effect on the Achievement of CD?”

コメンテーター：Eduardo Araral（シンガポール大学）

まず栗田さんの論文の印象は、多くの図が使われる一方で WB などといった組織名がでてこなかった。しかし、方法論の発展に焦点が置かれ、Community-building や Institution building がどのように影響しているのかが記述されている。

報告 2.4：不破信彦（千葉大学）

“Assisting the Philippine Government to Complete Agrarian Reform: a Case Study in the Support for Institutional Change through Capacity Development”

コメンテーター：木村出（JBIC）

不破先生の発表を聞いて 4 つコメントがある。一つ目は対象地域、二つ目は受益者、三つ目はターゲットして面積を明確に示すことで実際の進行状況を数字で示した点である。4 つ目はゴールとして土地の配分を示すだけでなく、配布された農民の政経向上の果たすことを目的にしている。それこそがその法律が成立したときの意義のあることだと思う。

報告 2.5：吉田栄一（アジア経済研究所）

“Capacity Building for Local Government’s Economic Development Planning: a Case of One Village One Products in Malawi”

コメンテーター：本田俊一郎（JICA）

吉田さんは、地理の専門とということで、空間的な視点にたって分析をおこなっている。マラウィに対して一村一品運動を発展させる要素を述べられたと思います。マイクロレベルでのお話をされたわけですが、もう少しマクロレベルのお話もお聞きしたかった。

オブザーバーとして一村一品運動を見てきたわけですが、吉田さんの発表で興味深かったのは、一村一品運動というのはJICAなどによって行われていたが、最終的にマラウィの国家が自分たちの活動として一村一品運動を導入し、発展させていったことである。必ずしも制度化とは言い切れないが、彼らなりの行動によって普及されてきたと言えよう。

ディスカッション

〔質問：恒川〕

午後のCDの定義は、セクターな分野で語られるCDと午前中に話題になったCD=ソーシャル・キャパシティをどうやって結びつけるのか。どうしたらよいのだろうか？いろいろなプログラムがいろいろなドナーによって行われているけれども、まとまりがない。ある国で上手くいっても他の国でアプリカブル(使うことができる)だとは限らないのでは？

〔回答者：松岡〕

午前中に議論したソーシャル・キャパシティ=CD(マクロレベル)で考えて、そうすると、それは制度と結びつくことになる。研究者であるから、それぞれセクター、分野が違うのは当たり前で、それらを脇において問題提起することが午前中の議論の目的であった。

〔回答者：又地〕

発表したプロジェクトに関してモデル性があるかと言えば難しいが、アプローチや手法に関してはモデル性があると言えよう。他のセクターもみた上で、分野別で、そのニーズ、優先順位を特定していく必要がある。今後はJBICと組んでいくため、もっと幅広いセクターからアプローチしていく必要がある。今日の事例はセクターに限りがあるけれども、昔よりかはスコープが広がっているのではと考えている。

〔回答者：吉田〕

アフリカの場合、アジアで普通に議論される共同で学習するとか知識のシェアリングとかが非常に難しい。知識とかを得ていくとどんどん閉鎖的になってしまっている。一村一品で成功している場所も、成功すればするほど閉鎖的になってしまう傾向があり、こうした点の克服が大きな課題である。

2008年7月18日

10:00-12:15

◆セッション3： キャパシティ・ディベロップメントと制度変化の計測と評価

モデレーター：斎藤文彦（龍谷大学）

報告 3.1：木全洋一郎（JICA）

“Capacity Assessment for Enhancing Development Effectiveness”

コメンテーター：朽木昭文（日本大学）

2 日前にソクラテスとプラトンを語るセミナーがあり、「正義とは何か」という話があった。この CD も正義と同じく、哲学的な議論とも言える。今回の木全報告はかなり具体的に説明された。まず、キャパシティとキャパシティ・ディベロップメントを鮮明に分けたほうがいいのではないかと思う。次に、キャパシティというときに、コア、テクニカル、イネイブリングという3種に分けていた。これらは、別の値としてベクトルとしておくのか、それとも、1つの関数としてある種の指標に持っていくのか？アウトプットとアウトカムの違いは何か。パフォーマンスというのにいくつかの指標ができていて、それぞれインパクトがある。このパフォーマンスにつながるベクトルとしてあるのがキャパシティであると思う。アウトカムとはどういう位置づけなのか？キャパシティ・アセスメントを最大化する必要があるのか？大事なことは、国をなんとかすることではなく、課題を何とかすることではないのか。

ディスカッション

〔回答者：木全〕

非常に重要なことが多いため、手短かに話すのは難しいのですが、課題を解決するために必要なキャパシティを必要なスコープやエリアで考えていく必要があると考えている。

〔質問：斎藤〕

何がインテグレートされているのか？政策なのか、いろんな PRSC か？木全報告がマクロのレベルで話されたことを、分かりやすく説明して欲しい。

〔回答者：木全〕

CD のインディケータ・コンストラクションは、マクロ経済に基づいている。ミクロのもの、要素や他への適用可能性が分かりにくい。マクロは国だから分かりやすい。

報告 3.2：和田義郎（政策研究大学院大学）

“Can Foreign Aid Help to Institutionalize Institutional Reform?”

コメンテーター：Heather Baser（コンサルタント・元 ECDPM）

ドナーが影響力を行使して、IC を達成したケースもある。我々のケーススタディーでは、外からの影響が IC に影響を与えた事例はたくさんある。ブラジルではネットワークの構築、パンアメリカンのネットワークの事例などがある。また、インドネシアでは、農村開発のプロジェクトがある。まず、JICA は調査を行い、最初は小さな規模で始まっても、少しずつ大きくなっていく。そして、スペースが大事だということを前回も話した。今回はそのケースの好例といえる。ただし、JICA は少し急ぎすぎた感もある。大きなプロジェクトだけでなく、小さなプロジェクトでも、地元のオーナーシップ、エネルギーを生み出しうる。規模が小さければ、地域のコンテクストを理解する時間もあるし、パートナーシップを強化しやすい。途上国では行政のキャパシティがしばしば弱い。土台作りにあまり時間をかけなくていいというメリットもある。特に、キャパシティが弱く、ニーズが分からない場合は特に小さいプロジェクトは有益だろう。デリック・グリーンカホフというアメリカの学者は、政府がオーナーシップを発揮しているか、政府の側に、政策の選択肢が与えられているか、ステークホルダーが関与しているか、努力の継続性があるかどうか、公共のコミ

ットメント、学習と適応の要素をオーナーシップとしてあげている。また、オーナーシップは、静学的なものではなく、変化していくものであることを強調したい。

ディスカッション

〔回答者：和田〕

確かに、小さなプロジェクトという点に関しては、パイロット・プロジェクトという形でやったほうがいいのかもかもしれない。内的有効性、外的有効性を区別する必要がある。外的有効性は、あるエリアで何か成功しても、他の地域で成功できるかどうかを検証するものである。内的有効性は、何かが成功したときに、何が成功要因なのかを検証するものである。ベトナムの事例が、どれだけ他の事例に適用できるかという問題は解決していない。

報告 3.3：田中勝也（滋賀大学）

“Sustainability and Environmental Management Capacity in Asian Countries”

コメンテーター：和田義郎（政策研究大学院大学）

回帰式での制度の成長率への貢献は、外性変数か内性変数かの区別がつきにくい。経済の成長と制度はお互いに強く関係しており、外的に制度が経済成長に貢献するとするのは難しい。キャパシティもパフォーマンスも内性変数といえるのかもかもしれない。

ディスカッション

〔回答者：田中〕

その通り。もっとデータを改善していきたい。

〔質問：松岡〕

（木全報告への質問）Enabling Environment を制度に含めてしまうと制度が外性的になり、CD と IC を切り離してしまうのではないかと。また、キャパシティ・アセスメントの要素を 6 つ言っていたが、これは何のためにあるのか。

（和田報告への質問）ベトナムは、CD があったから発展したというのか、それとも WTO に加盟したからできたのか。マクロとミクロの関係はどうなるのか。

（田中報告へコメント）制度も一つの内生変数と出来るとより説得力のあるものになるのでは。

〔回答者：木全〕

ドナーは途上国の CD に対して何もしなくていいということではなく、それを囲む人たちをどう巻き込んでいくかが鍵となる。評価基準は、研究目的ではなく、JICA の業務用に開発されたものである。実際にはまだ使われていない。ただし、一部は、タンザニアのプロジェクトで使われている。ちなみにこの基準はプログラムを主に想定して開発されている。

〔回答者：和田〕

ベトナムは、ミクロのメカニズムは良くできている。ただ、ミクロができていても、マクロでおかしくなる、ということが考えられる。例えばベトナムは貨幣供給をコントロールできず、激しいインフレが起きている。これらを繋げるメカニズムが重要であろう。

〔回答者：田中〕

IC をどう変数にするか、というのは重要な問題である。しかし制度変化とキャパシティは相互依存の関係にあるので、別の変数として扱うのは難しい。今後は構造方程式などを用いていきたい。

〔質問：一般参加者（田中報告への質問）〕

SCEM で、二酸化炭素と森林の面積の両方を変数として採択するのは不適切ではないか。また、環境への予算配分なども指標として使えるのでは？二酸化炭素は途上国では汚染物質としては扱われておらず、指標の妥当性に疑問がある。SOx や NOx, PM10, 水質などを用いたほうがいいのでは？

〔回答者：田中〕

その通りだと思うが、指標データの不足が問題としてある。環境予算や汚染物質のデータは国によっては入手できないが、改善の余地はある。

〔質問：一般参加者（全体と和田報告への質問）〕

（全体）Endogenous, Exogenous は内性・外性といわれているが、モデルのそれと地理的なそれを混同しないほうがいいのではないか。そもそも内性と外性はそんなに重要なのか？

〔回答者：和田〕

制度を外性として扱うことは可能であるが、今はこれをどう展開するかを考えるので、これは内性変数として扱う必要がある。

13:15-17:00

◆ セッション4：開発援助におけるキャパシティ・ディベロップメント

モデレーター：松岡俊二（早稲田大学）

報告 4.1：澤田康幸（東京大学）

“On the Role of Technical Cooperation in International Technology Transfers”

コメンテーター：田中勝也（滋賀大学）

澤田報告は、国全体からみて、TC の全体的な技術移転に対する効果を計るものであり、詳細に練られた良い研究だと思う。短期、長期に分けて考えたらどうか。データはより最近のものを使えるか？

ディスカッション

〔回答者：澤田〕

長期・短期の分離は有効と考えられるので、現在行っているところである。

報告 4.2：三輪徳子（茨城大学）

“Capacity Development: From Concept to Operation: Lessons Learned from a Global Study on Effective Cooperation for Capacity Development”

コメンテーター：斎藤文彦（龍谷大学）

CD と TA の違いがよく分からない。これを区別しない限り、何を追い求めているのか分

からない。CD は TA を足し合わせたものなのか。CD は、途上国がつくる包括的なショッピングリストなのか？違うはずでは。このところをより明確にするべき。マルチセクターの CD は、ガバナンスのことではないか？途上国の政府の役割が変わってきている。現在は、政府そのものがサービスをするのではなく、ファシリテーターとして動くことが求められている。そのための CD とはどうあるべきか。学習に関して。どう複数のレベルで CD を進めていくか。また、Institutional Change と Organizational Change の区別が必要では？

ディスカッション

[回答：三輪]

CD は途上国の能力であり、TA はそのためのインプットであるし、ガバナンスの問題とも見ることができる。CD 支援の対象は、政府だけでなく、他の組織もある。ファシリテーターとしての能力の支援もありうる。ここでは、Organizational Change と Learning を同じに扱った。

報告 4.3：田中耕太郎（JBIC）

“Capacity Development and Institutional Change in Indian Water sector”

コメンテーター：朽木昭文（日本大学）

キャパシティの定義と Endogenous の問題がずっと続いている。木全さんはキャパシティがベクトルになっているといった。これは、Institution や Society のキャパシティ、ヒューマン・キャピタルなどが含まれる。CD はこれらの変化か？人間や地球も内性化しなければいけないのか？どこまで内性化する必要があるのか？

ディスカッション

[コメント：松岡]

新 JICA への国民の期待がなさ過ぎるのではないか。もっと国民に新 JICA が何をするのかをアピールしてもいいのでは。

報告 4.4：高瀬浩一（早稲田大学）

“Structural ODA and CD Expenditures from Japan”

コメンテーター：木全洋一郎（JICA）

クロス集計（地域、経済レベル、ドナーなどで）を行うと面白いデータが出そう。変数の定義：カテゴリーに含まれる分野が多いところは、当然、量がおおくなる。バランスが欠けているのではないか。いくつか分類に疑問点もある。支出で集計すると技術協力は埋もれてしまう。プロジェクトの数ではどうか？プログラムとしてのシナジーを集計するか？それぞれのアクターの相互関係をどう計っていくか？例えば、関係者の数や、制度変化（IC）に貢献するプロジェクト数など。

ディスカッション

〔回答：高瀬〕

シナジー効果は、生産関数をみればはっきりしてくると思う。水がなぜFに分類されるのか、という疑問はもっとも。ただ、プロジェクトの内容を見たところ、非常に規模が大きく、インフラ整備に近いと思った。

報告 4.5：木村 出（JBIC）

“Policy-level Improvement and Institutionalization of Field-level Trials: Achievement of Third Elementary Education Project (TEEP) in the Philippines”

コメンテーター：又地 淳（JICA）

JBIC は JICA と関わり方が違うな、と感じる。JBIC は包括的である。しかし、大事なポイントは共通している。その一つは、成果を見える形にしていること。スクール・ベースド・マネジメントを通して、自分たちでやりたいことを自分たちで決める、というのが重要であると感じる。なぜ、School based management が最初に含まれていなかったのか？SBM のサステナビリティを確保するための予算はどうなっているのか？制度変化につなげるためのどのようなメカニズムがあったのか。パイロット・プロジェクトを拡大していく仕組みはどうなっていたのか。学生の成績につながったのは、具体的にどのような要素なのか。プロジェクトで、必要であったこと、そうでなかったことを分けて、最小限のパッケージを作るのも面白いと思う。教育省のオーナーシップを強化するために、どのようなことを行ったのか？

ディスカッション

〔回答：木村〕

フィリピン政府は円借款を借りてでも基礎教育を強化している通り、オーナーシップは他国に比べて高いといえる。一方で、従来より固定資産税の1%が教育費に充てられているものの、依然として教育予算の財源は十分でないが、SBM には一定の政府予算の充当が確保された。TEEP を通じて導かれた最小限の開発パッケージとは、まさに SBM である。

報告 4.6：Eduardo Araral（シンガポール大学）

“Time to Rethink Technical aid: The 80:20 Principle of Building Governance Capacity”

コメンテーター：花里信彦（名古屋大学）

インドネシアでは、トレーニングはトレーニングとして構成されていない。先ほどのトレーニングでは、現場の指示をえにくいと思う。知識は形式知、暗黙知と分かれると思うが、暗黙知は軽視できない。このような暗黙知をどう扱っていくか。受ける側の CD 側に焦点が行きがちだが、ドナー側のキャパシティにももっと注意を払うべきである。はたして新 JICA にはこのような CD に取り組むだけの能力があるのだろうか？JICA の新研究所は、研究だけを目的とするのではなくて、問題解決をあくまで目的として欲しい。

ディスカッション

〔回答：Eduardo Araral〕

CD とは何かと考えるときに、内発と外発を分けて考えようとするが、現場で考えると、両方同時に起きていると感じる。中央・地方・ドナーなど、重層的な制度が時系列的に変化している。一番大事なのは、相互理解。そうしないとCDは始まらない、ということ。そして、その理解をCDにどうつなげていくか考える必要がある。理解すると同時に関係性を構築すべき。共通の理解が重要であることには同意する。また、内発、外発の問題では、経済学者の友人によれば、これは古典的な問題で、この解決にはもう少し時間がかかるだろうと思う。

◆閉会挨拶：松岡俊二（早稲田大学）

このような専門的な議論の場に、二日間で延べ 200 人ちかい参加者があったことは、こうした問題に対する関心が強いということだろう。今回、私たちが企画したこの国際セミナーでは、主に以下の5つのことを提案し、議論を行った。

(1) 研究者と実務家との真剣な議論を通じ、従来の「キャパシティ・ディベロップメント (CD)」の議論から「キャパシティ・ディベロップメントと制度変化 (CD&IC)」の議論へと研究と実践の展開を図る。

(2) CD の議論を技術協力 (TC) だけに限定することなく、借款なども含めた全ての開発援助の分野へ拡大する。

(3) こうした「キャパシティ・ディベロップメントと制度変化 (CD&IC)」アプローチを具体化するため、従来の Project/Sector アプローチから新たな「Program アプローチ」への転換を図る。

(4) また、CD&IC アプローチを具体化した新 Program アプローチによる新 JICA/日本の開発援助の革新を行う。

(5) 以上のことを通じて、日本の優位性（現場の知識の強さ、TC+Loan）を生かした Micro/Macro Paradox の克服、Micro/Macro Loop（制度）の形成を行う。

おおむね以上の 5 点の重要性は今回の国際セミナーで議論されたが、まだまだ研究し、実践を通じて明らかにすべき点は多く残されている。今後ともこうした努力を続けていきたい。

最後に、二日間にわたり熱心な議論をいただいた報告者、コメンテーター、参加者の皆さんに感謝を申し上げ、セミナーを終了する。